
女神の居ぬ間に

猫田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の居ぬ間に

【Zコード】

N7153U

【作者名】

猫田

【あらすじ】

世界を見守ってきた女神が消えて、物騒になつた世界での出来事。居なければ居ないで仕方ない、楽しく生きればそれで良い。な人たちの話。

自分の趣味全開ですみませんなカンジ。暇を見つけて書いていきます。

プロローグ（前書き）

初投稿です。至らなこといろいろもありますが、よろしくおねがいします。

プロローグ

この世界がいつ生まれたか、誰も知らない。

ここに暮らす人々は、己の住む土地があり、町があり、家があれば問題ない。

そして神のように崇めている女神がいれば大きな災害もなく魔物による虐殺もなく、心静かに暮らしていくと信じていた。

その女神がいなくなるまでは。

数日前、女神が姿を消した。

この大陸の一番古くからの歴史があるシザンサス帝国の首都にある、白い塔。

クレオメの塔の最上階に女神は住んでいた。この世界を作った創造神により、結界の張られた塔の上で人を見守る役目を持つたという。

女神が姿を消してから凶暴な魔物が各地に現れるようになった。女神が姿を消してから国同士が国土を求めて争うようになった。女神が姿を消してから・・・

なぜ、と。

女神は人間を見放したのか。

何が女神の逆鱗に触れたのか、と。

人々は女神を渴望する。

女神が居なければ生きていけないのではないか、と。

絶望に打ちひしがれていたところに一人の人間が立ちあがつた。

「今こそ生き延びるための試練の時。ここはわれらの住む場所、われらの世界。

いつか女神が戻つてきてくれると言じ、この世界を守りうではな
いか！」

シザンサス帝国の王子だつた彼はそう言つて国を建て直し始めた。

何百年経とうとも人の願いは変わらない。
誰もが願う、女神の再来を。

第1話

田の前を蚊が飛んでいく。

最近の拠点としていたエルビナの街から歩くこと4時間、一向に目的地が見えずにため息をこぼす。

つうそうと木々が茂る森の中、目指すは古代の神殿である。

「…デマだつたとか?」

ぽつりと洩れた言葉。

男の名前はシオン。冒険者ギルドに所属しているAランクの剣士である。

赤い髪と黒い目に剣を振つてきただけの事はある筋肉。

それなりに御嬢様方にもてそつな外面だったが、何故か内面は学者肌。

3度の飯より古代遺跡が大好きという変わり者。

剣士の腕は、遺跡を一人で気楽に回りたいが為に覚えたという阿呆な努力家。

彼は3日ほど前に情報屋からこんな話を聞きだした。
曰く「エルビナの近くの迷いの森に、遺跡と女神が眠っている」と。

「なんでも女神の搜索のためにシザンサス帝国から騎士団が来ているらしいよ」

噂の範疇を出ないのに騎士団なんてびっくりだよね、と自称ベテラン情報屋の新米が笑いながら話してくれた。

シオンの眉間にしわが寄つていく。

（遺跡の価値もわからぬ彼らに先を越されてなるものか！十中八九踏み荒らされる！）

女神という単語を綺麗にスルーしているが、彼は気にしない。気付かない。

そして、本物かどうかもあやしい地図を銀貨2枚という高値で購入し、今に至る。

（だが、ここには神殿があつたのは確かだ）

空氣中、動植物、この世界のすべては『マナ』というエネルギーの恩恵を受けている。

木々の成長や、魔獣の強さはマナの吸収に左右されているといつてもいい。

もちろん魔術の行使に必要な魔力もそうである。己の中にあるマナを使って魔術を使用したり、大気中にあるマナを使って魔術を使つたりする。

昔からマナの多い場所に神殿が建っているのはよくあることだ。なぜなら、そこには精靈が居ると言われているからだ。

精靈の恩恵を受けようとここに彼らを祀る神殿を造る。

ま、本当に居るのか怪しいのだが。ぶつちやけ気分の問題だ。居るよつた気がするといつ。

今シオンが立っている場所には空気中のマナの含有量が他の場所に比べてかなり多かつた。
その所為か木々の茂り方も尋常ではない。

ここまでマナが多いと神殿があつたのは確かだら、と心が弾む。

両手で己の頬を叩き、気合を入れる。

ふと見えた手のひらには蚊が圧死していた。

それが見えた途端入れた気合が急速に出て行つたようで、また盛大な溜息を吐くと、重い足取りで森の奥へと入つて行つた。

第一話（後書き）

短くてすみません。

寄つてぐる蚊をはたき落としながら黙々と進んでいたシオンがそろそろ本気で帰らつか悩み始めた頃、ようやく遺跡の端っこが姿を現した。

古代の建物のはずなのに、まるで今造られたばかりのようなめらかなさわり心地と傷ひとつないその姿。

「おおーう
だらしなく目と口元が緩んでいる。
誰か他に居たならば、『氣味が悪い』と言わずにほおれない表情だが、幸いにも今は彼一人だけだ。

なでなでと柱を撫でまわし、鞄から本を取り出して独り言を呴きながらページをめくる。

「約300年前のもので間違いなさそうだな。
ロシーナ地方にもこれと同じ石材を使った神殿が300年前って言われているもんな」

「こじとロシーナ地方の距離は……ことは、碎石場は……
と、相変わらず思案顔で咳きながら、手に持っていた本を鞄にしまいこみ、歩き始める。

神殿を正面から見ると、乳白色のつやめく石柱がシンメトリーに並んでいる。

そして建物の中からあふれ出でてくるように水が流れ出て小川をつくり、石柱のわきに池をつくっていた。

「いつや水の神殿つてどりうか」

そう言つてシオンは神殿の中に足を踏み入れた。

「うーん、思つていた以上に何もない。ホントにない」

あたりを見回しながら残念がる。

シオンは何かしらの文字やら紋章やらを期待していたのに、何部屋か通り抜けた最期の部屋は何もないとただの空洞だった。

こういった神殿の最期の部屋はだいたい祈りの場と呼ばれ、石の台座があつたりするのだが、それもない。

それでもここへ来るまでの苦労を思い、念入りに調べてみると、奥の壁に何やら文字が書かれているのが見つかった。

「古代文字かー！」

ぐふふ、と笑い声を上げながら、鞄の中からまたもや本を取り出し、古代文字の解読に乗り出した。

1時間くらいそうしていただろうか。

「解読完了ー、おめでとう」

そう言つて本から顔を上げた。

「えーと？ 田覚めの合図は朝に啼く声……って、何の意味があるんだ？ 朝に鳴くって言つたらあれだろ、鶏。『こけこつけー』なーんて……」

そのとたん地鳴りが始まった。

部屋全体が揺れている感じがし、立つていられなくなり膝をつく。天井から埃と砂がパラパラ落ちてくる。

そして古代文字が書かれていた壁がパズルのように左右に動きだし、もう一つの部屋が現れた。

(クイズ？ ってか、そんな阿呆な扉の力ギつてありなの？ …… 気分的にはあれだよな、開けゴマ)

オープンセサミじゃなくてよかつたなーと混乱し始めた頭で現実から逃げてみたが、

部屋の中の様子がシオンを現実に戻させた。

「人？！」

その部屋には寝台がひとつあった。

お姫様が寝るよつた天蓋付きの豪華なベッド。

ベッドからもぞりと起き上ったのは少女。

艶やかな漆黒の髪に銀色の瞳、幼さは残つてゐるが、見た目的には15歳くらいだろうか。

透き通るよつた白い肌に真つ白なワンピース。

まるで天使のよつた精靈のよつた浮世離れした雰囲気を持つ彼女。

くわつ、と欠伸をしながら田をこすり、茫然とつ立っていたシオンに田を向いた。

そして言葉を紡ごうと口を開き、

「べべべー るるる……」

と、盛大にお腹を鳴らしたのだつた。

第3話

田の前にはもくもくと人の携帯食を食べ続ける女の子がいる。色々と聞きたいことはあるのだが、なんだか話しかけずらい……と言ひか、食事に夢中で声かけても気付いてくれそうにない。

(ああ、俺の携帯食が……)

どんどん女の子のお腹へと消えていく食糧に、今日街に帰るまでの携帯食だけは取つておかなれば、と考えるシオンであった。

「本当にすみません」

あれだけあつた食べ物は今は紙屑と化している。
さすがに我に返つたらしい女の子は顔を赤く染めながら俯いている。

「えーと、瓶は何でこんなところにいたの?」

シオンはなるべく優しく尋ねる。
だつて見るからに泣きそうだ。

まあ、初対面の異性に腹の音を聞かれたらな……しかも携帯食ほほ

食べてしまつたらな……

「すみません、分かりません」

「…………いつからあそこのこたの？」

「さあ？」

「…………あれ」

何やら雲行きが怪しくないですか？

いけないもの田覗めさせたとかですか？

「あっ」と女子が声をあげた。
そして一コリと微笑みながら言つた。

「名前だけなら分かります。

PHと聞こえます。もうじくお願ひします」

(… むりじへつて)

物を込み前提で話が進んでいる気がしてならないショーンはやつと
ため息をついた。

「とりあえず、ユウ。
こんなところじゃ話もできない。街に帰るから。だいぶ歩くが大丈
夫そうか？」

早々に帰りたくなつたので帰ることにした。
携帯食もないし。

ただ、細くて体力もあまりなさそうなユウが4時間以上歩けるか
心配だった。
途中休憩はとる予定だが。

「はいっ！頑張ります！」

はい、頑張って下さいね。

ふたりで神殿から出ると、ものすごいスピードで、横の石柱の陰
から武装した人達が飛び出してきて、あれよあれよという間に囲ま
れてしまった。

ただし、盗賊とか冒険者とかいうような団体ではない。
ちょっとキラキラしてる感じ…

(「…見ても騎士団ですよね）

ユーハはよくわからない様だが、シオンの後ろに隠れるよつこじて服にしがみついている。

騎士団の中のどうやら隊長と思われる人物が田の前に出てきた。開いているのかわからないうらいの細田。見た目、筋肉のぶつかり合いよりも頭脳戦のが得意そうな男。

騎士団の隊長とかより宰相のほうが似合ひそうだ。

彼は一度ユーハに田を向け、そしてシオンの方へ田を向けて口を開いた。

「申し訳ないのですが、そちらの彼女、私達に渡していただけないでしょうか？」

「……理由は？」

「そちらの方が女神だという文献が先日出来ましてね。お迎えに上がった次第です。…渡していただけますかね？」

女神？ こいつが？ と、驚きユーハを見ると、彼女も驚いたよう田を見開いてポカンとしていた。

シオンが見ていることに気付くと、困惑したような顔でふるふると首を振り、ギュッときがみついてきた。

ユーハのなんて言えば、全身に穴が開くのは田に見えている。が、何だか放って置けない。

どうしようかと思案していると、頭上から声が降ってきた。

「あー、その子、こっちに渡して欲しいんだけどな…駄目かね？」
青年？

頭からぼり布を被つた第3者。

(三つ巴)…一)

かなり厄介なことになりそうな予感に、シオンは何だか胃がキリキリしてきたのだった。

第3話（後書き）

小説作つたら保存できなくてどうしようかと思つた……。・・・
直つたけど。

第4話

シオンを青年呼ばわつしたやつは、声からして女性の様だ。どうやってこの状況から脱出しようか考えていると、頭上のやつがシオンに向かつて何かを投げてきた。

皿の端にそれが皿に入る。

透明なガラスに似た石。

シオンは慌ててユエに被さる様にして、体勢を低くする。もう地面にくつつくくらい。好きで地面とキスはしたくないが……

ユエはシオンに潰されている。潰れた蛙のような声が聞こえた。痛々しい。

「ひづりー」

騎士団の隊長の舌打ちが聞こえる。

何かを回避するように、バックステップで跳ぶが、彼女は慌てず言葉を紡ぐ。

「雷墜」
「らいつい」

バリバリと音を立てて口から雷が迸つた。しかも広範囲に。ただし、シオンとユエは見事に避けて。

「ン、と、石がシオンの頭に落ちてきた。顔をあげると回りには雷によつて氣絶した騎士団。

目線をもう少し上に移動してみる。

ぼろ布を外したやつが見下ろしていた。

見たことがある顔だった。

シオンは浮かべた苦笑をそのままに話しかける。

「なんて挨拶だよ、カーラ」

「あは。久しふりー」

緑色の瞳に、焦げ茶色のせらりとした髪の毛を、後ろで緩くひとつに縛つている。

ぼろ布の下は着物の様な上着に膝丈のズボンにブーツといつ服装だつた。

表情は嬉々として、楽しかつたですと語っていた。

「あのー、おふたりは知り合いですか？」

神殿から降りてきたカラに向かってユエが話しかけた。

「まあねー。私はカラーラ。よろしく」

「私はBHと言こま。よひしへお願こつせか」

仲良く自己紹介しあつてゐると思つていたら、カラーラが爆弾を投下した。

「私、娼館に居たんだけどね、シオンはそこにお客で来て知り合つたのよ~」

ザツとゴンがシオソと距離をとつた。

その瞳にはなんとも言えない色が浮かんでいる。

これは確実に誤解している。

「ま、ま、ま… 待て！ 誤解だ！ そ、うなんだけど、そ、うじやなくて…」

手を伸ばしたが避けられた。悲しい。

カーラの笑顔が憎たらしい。後で本気で絞めてしまいたい。

「カラは薬師の仕事で娼館にいたの！で、俺はその主人と馴染みで、主人に仕事依頼されて行つただけ！分かつた？」

カラーの説明は所々抜けている。しかもそれを本人は分かつてやつてるからたちが悪い。

「え？ あつ、誤解…ですか？ ……す、すみません…」

顔を真っ赤にしながら謝つてくれた。可愛らしい。

シオンにしてみれば元凶からの謝罪が欲しいところだが。

「そう言えども、さつきのは向だつたんですか？」

「あれは、じょうれいせき晶靈石というの。あれに魔術を仕込んでおけば、魔術が使えないやつでも術が打てるという代物よー」

晶靈石の値段はそれほど高くない。

中に入っている属性にもよるが、安いとコシペパンひとつくらいの値段で買えてしまう。

しかもサイズは人差し指の爪くらいの大きさで、使い方によっては高威力という優れもの。お手軽なアイテムだ。

「で？ お前は何しにここに来たんだよ？」

「何じにって、さつき言つたじゃない。ユエを貰いにって

一瞬で険悪な雰囲いき気がシオンから漂い出すが、それを見たカラはパタパタと手を振つた。

「ま、帝国の騎士団に渡さないのが前提なだけで、私がユエのそばに居られれば問題ないわけよ」

これからよろしく、と言われてしまった。

何がどうなつてそれで問題ないのか分からなかつたが、とりあえずこの疲れた身体と精神を癒したい……と切に願うシオンは、考えることを後回しこして、ふたりを引き連れ街へ向かつた。

無論、騎士団はそのまま放置で。

第5話

エルビナの街。帝国領の外れに位置し、迷いの森や死の沼など、冒険者の格好のレベル上げの場所が近場にある。

故に、街には魔獣の素材がところせましと売り出され、小さい街ながらかなりの賑わいを見せていた。

その街の中の下くらいの宿、『夜中の鶏亭』の1階にある食堂に3人プラスひとりは座っていた。

「……ストーカーみたいです」

「騎士団の隊長がストーカーなんて最低。評判がた落ちー」

ゴヒとカーラの言い様に騎士団の隊長はうつ、と呻いて凹んだ。

あの後、気絶から立ち直った騎士団は、彼らを追つてエルビナの街にやって来た。

隊長の名前はアシムといい、誰にも彼にも隊長なんて似合わない、と毎日のように言われている。

顔がそっくりの兄弟が文官などをやっているせいもあるかもしない。

事は数日前、何時ものように城下町の見廻りやら新人の訓練やら
デスクワークやら、雑務に追われていた。

そこへ皇帝陛下からの火急の要請が飛び込んできた。

曰く、『ハルビナの街、迷いの森の奥にある神殿から女神を連れ
てくること』

事の詳細は不明だつたが、どうやらクレオメの塔の女神が居たと
される部屋に、文字が現れたらしい。

そこに書かれた言葉が先程の皇帝陛下からの命令の文章だ。

そんなこんなで遙々王都からやつて來たのだが、剣士に先を越さ
れるは、ぼろ布被つたやつには氣絶させられるは……

これじゃ王都に歸れないとい、追つてきたら、ストーカー呼ばわり。

だが、ここで引いたら負けだと自分に言い聞かせ、背筋を伸ばし
た。

「ですから、クレオメの塔に神託があつたんですから。連れていくのは正当な理由でしょうが！！」

「あ、あ？」「ちは女神が夢枕に立つたんだって言つてるでしょ！」

シオンはアシムとカーラの言ひ合いから早々に避難した。と言つても、椅子を少し引いただけだが。

つまり、なるべくふたりの視界に入らないようにしているだけともいづ。

騎士団は、皇帝陛下の命令もあるので連れて帰らなくてはならないのも分かる。

「本当にそれが女神の言葉なのかも怪しいわ。つてか、連れていたら閉じ込めることが必死でしょ！一度と女神を失いたくないって。そもそもユエが女神だつていう証拠もないし。女神かどうか確かめる…なんて言つて変な実験に付き合わされたりとかされるかもしれないし！って、聞いてんのかゴラア…！」

カーラの滔々としゃべる気迫に仰け反るアシム。だが負けじと机をバシンと叩きながら立ち上がり反論する。

「ですから……！」

(いつまで続くのかな、これ)

話に付いていけなくなつたユエとシオンは白熱するふたりをそのままに先に部屋へと戻つていつた。

それから数時間後、カーラはアシムを伴い部屋に戻つてきた。ふたりの表情でじかに軍配が上がつたのかわかる。

「とりあえず、この方はあなた方に預けます。戻つて陛下や宰相と相談し、今後について決めさせていただきます。ですが、こちらにしても目を離すわけにはいきませんから、監視を付けをせてもうかつことになりました」

「監視？あんたがか？」

「いえ、そうしたいのはやまやまですが無理なので、私の子飼の傭兵を」

1週間後にその傭兵がここに来るといつ。

監視などというのは気に食わないが、両方の折り合いを付けたらそれは仕方がないと思つておく。
さすがカーラ。よく向ひうまい話をさせた。後で讃めておいつ。

「ユエ、モーガーことだから、女神様の通りに私が守つてあげるわね。シオンや私とたくさん色々な所に行って冒険とかしましょ

「はいっ…楽しみです…」

そんなこんなで、シオンは女の子ふたりと冒険をするよつだ。巻き込まれ決定らしい。

男の子のあこがれのハーレムみたいだし、ま、いつか。

「つてことだから、シオン。コトに装備一式買ってあげて

……下僕扱いですか？

第6話

懐の財布の中はだいぶ寂しくなっているが、GHの装備はなんとか買えそうだ。

……下の上くらいならなんとか……カーラの文句付きでお買い上げな感じになりそうです。

「……やっぱ、とシオンはカーラに尋ねた。

「お前さ、女神様からGHの事何か聞いてないの?」の誰かとかれ

「……子供だつて」

「は?」

「いや、だから、子供。女神様の子供」

それって女神様の血縁者つて事ですよね?

「アシムに悪いことしちゃった?」

女神様の血縁者ならば、何かしらの能力といつものがあつて、よくわからないが、クレオメの塔に連れていけば世界がまた平和に戻るとか。なにせ女神様もあの塔で人々を見守つてたと言つじ。

……なにやら世界の平和を思いつき先伸ばしさせた感じがする

のですが。

「ああ。血縁者だからとこつて世界の平和とやうじな直接関係無い
そつむ」

シオンはもうひとつ疑問を口にした。

「ゴンは誰かに狙われているのか？守れって言われたんだろ？」

「誰とは言わなかつたわ」

まあ、でも。と、ゴロリと寝台に寝転がりながらカーラは続ける。

「適度に守つてあげるつゝ言つといった」

女神様にまでこの言動。ここでの性格は適当だったと思つ出した。
適度つてどんなどよ。

「やういえばお前、遊廓での仕事は？こんなところにて良いのか
？お抱えだろ」

カーラの職業は冒険者ではなく薬師だ。いつも、たくさんの引き
出しの付いた木箱を担いで諸国を回つてゐる。

ちなみに、先程の神殿では手ぶらに見えたが、実は神殿の陰に隠
していたそうだ。あんなのを担いで表れるのはちょっと抜けてるし
変だうう、と思つたらしい。そこまでやらなくて……と思つたの
は秘密だ。

「薬の材料の在庫が無くて。この街に採集に来たのよ

王都の一角にある花街。通称ヨシワラ。各所に点在する娼館とは少し異なり、昔から独自の文化を築き上げてきた場所だ。

人は皆『ワフク』という袖が長く、襟の部分を前で合わせ、帯で縛るだけという服を着ている。

簡単に見える服だが、柄や装飾に凝つており、華美絢爛な服なのである。

呼び方も少し異なる。娼館を遊廓と呼び、娼婦を遊女、くらいの高い娼婦を花魁といつ。

そのヨシワラで初めてカーラとシオンは出会いた。

忘れもしない。強烈な出会い……

初めて会った時、遊廓の前で数人の花魁と一緒に（たぶん客だと思われる）男を袋叩きにしていた。

それはもう楽しそうに。ビニールを切り落とそうか？……なんて話は聞かなかつたことにした。他人事なのに思わず手で隠した。

後で聞いた話だが、その男は花魁の二股をしたらしい。ヨシワラでは「二股はご法度。

このヨシワラの不文律を破る人間には花魁からのキツイおしおきがあつたりする。

『シワード薬師は重宝される。

性病、避妊などなど。

その店に気に入られれば、だいたいお抱えの薬師になる。

「やつや！」苦笑

「お抱えって言つても、私はその他の娼館でも仕事してゐる。あつとあそこだけに歸られないわ」

さすが一流の薬師。超売れっ子。

強烈な出会い以来、違う街や森の中ではぱつたり会つたりとかやけに縁があり、いつの間にか気を許せる友人になつていつたのだ。

昔の出来事に思いを馳せていると部屋がノックされ、ユウがお盆にゴップを3つ乗つけて入ってきた。

ゴップの中の黒い色した液体がショワショワと音を立ててこむ。
……ただのゴーラであるが。

「お待たせしましたー」

カーラ曰く、『ユウの初めてのおつかい』らしい。

部屋に上がりてきて、シオンと色々と話し込む前まで、注文の仕方とお金の使い方をレクチャーしていた。

「うん、ちゃんと貰つてこれたね」

「はい！大丈夫でした！」

「うむー重畳、重畳」

そう言って、カラーラはお盆から「カララを取つてゴクゴクと飲んだ。

3人は明日からの予定を確認し、シオンは男だから当然別室へ帰つていった。

第6話（後書き）

言葉のお勉強講座（笑）
重畠……この上なく満足である」と。

第7話

一夜明け、3人は街の裏通りにある武器屋に来ていた。大通りにも武器屋は何軒があるのだが、今居るこの店は知る人ぞ知る名店と言われている。値段は高いが、良いものを出す。ちなみに、知っていたのはシオンでなくカーラだ。

ガランガラン、と店の扉に付けられているベルが来店を知らせる。

「悪いが今日はもう店じまいだ」

店の奥から出てきたのは、頬に古傷のある大男。髪に少し白髪が混じっている。昔冒険者としてブレイブイ言わせた口か……

ブレイブイって死語か……？

どうやうこと機嫌が悪そうだ。

「まだ朝だよ、おっさん。……酔つてゐるね。今日はこの子にナックル系の武器を売つて欲しくてね」

カーラはそう言って、懐から取り出した薬紙をそつと机に差し出した。

チラリと店主は視線を机に向か、次にカーラに視線をやり、薬紙を持つと店の奥に引つ込んでいった。

「カーラ、……今のは？」

何かの取引材料だとシオンは思った。しかし、返ってきたのは意

外な言葉だった。

「ああ、一回酔いに効く胃薬」

……差し出しが紛らわしいです。

ちなみに、来るたびにあんなやり取りをしてくるやつだ。

「おう！待たせたな！」

10分ほどして、バターンという扉を壊しかねない音と共に、嫌も顔色も良くなつた店主が出てきた。 機

「で？なんだつけ？」

「……この中に合つナックルをくれ」

店主が「冗談だろ？」といつ田でコエを見た。

真っ白なワンピースに細い腕。どう見ても後衛向き。彼女に前衛武器のナックルは似合いそうにない。

服は後で買いに行く予定です。

シオンもカーラも始めは後衛職をさせる氣でいた。朝のあの事件がなければ。

3人は朝食を食べに1階にある食堂に降りて来た。
冒険者御用達の安い宿の為、朝から遠出をする冒険者達がひしめき合っている。

空いた席に腰掛け、早速注文をする。パンとハムエッグとサラダのセットか、飲み物はリンクのジュース。

注文した品はすぐに来た。まるでリストのよつに頬に食べ物を詰め込みながら食べるユエ。

可愛らしいです。

ほのぼのした朝食だったのに、急にカーラの機嫌が悪くなる。シオンがカーラの視線をたどると、ニヤニヤした男たちに目が止まる。

シオンは慌てた。

「お、落ち着け！相手は人間だ！殺られる前に殺らんてくれ！」

シオンの心配を知らない野郎共は勇敢にもカーラとユエに話しかけた。

「よう、ねーちゃんたち。そんなダサい男とつるんでないで、俺らと冒険にでもいかねえか？」

そう言つた男はカーラの肩を抱き、頬を撫で話しかけた。他の男

も回じよつにゴエに触る。

カーラの足の下の床板がミシリと軋む。あ、いつや駄目だな……
とシオンは思ったのだが、今回はカーラの手が出るとはなかつた。
なぜなり……

「……つづー食事の邪魔をするなああつづー……」

ゴエの拳がクリーンヒットした男は、切りもみしながらふたつ向
いつの机まで飛んでいった。

お見事！

ゴエは振り向きやまに、カーラに絡んでいた男の顔面に肘鉄を食
らわす。

メリッという音と共に吹っ飛んだ。

「まつたく！」

憤慨しているらしくゴエは、チラリと周りの男どもを見た。
ザザツと距離をとる彼ら。そして顔を見合せると、倒れてる男
ふたりを連れてそそくさと逃げていった。

ゴエは何事もなかつたかのように、食事を再開する。

「凄い威力だわ、あの拳……」

呆れたようにカーラが呟いた。

「武器さあ、ナックルでもいけるんじゃない？」

「そうね……でも、恐怖で脚がすくんで困るけど。ビーダル?」

朝食を食べ終えた彼らは、近くの森に入った。ゴホの武器はとりあえずロッドで。水系の魔術は使えるらしいので、それで。なのに、魔術を使わず杖で殴るという新しい使い方をした。ちなみにゴホは殴りずらいとのたまつた。

もうひとつこのヒ、ロッドは一度と使えない状況です。拾い物だから良いけど。

……彼女の武器は殴れるやつ決定で。

「あー、これがこれ。それかこいつ。」

店主が出してきたのは3種類。

ひとつは金属の輪が連なつていて輪に指を入れるだけのもの。もうひとつは革製の指あきの手袋状で、甲の部分に金属が入っているもの。

最後のは、肘の部分まで全て金属のもの。

一番最後のが防御まで考えた場合一番良いのだが、ショックギングピンクが目に痛い。

「何このデッパンク……」

「これが…これは俺の自信作だ！」

アズロラマカイトという鉱石で出来ている。2種類の鉱石が混じりあっている石で、軽いし、強度も申し分ない。大型ドラゴンと戦う予定はないのでこれで十分だね。ピンクでさえなければ。

塗料で塗つてある様なので、落としてもらつことにした。店主は渋つたがカラーラが脅した。

やり方は言わないでおく。

「で? いくらだ?」

「25万ルク」

シオンはカラーラの腕を引つ張り、店の隅に移動する。ユウがビックリしたの? という表情をしてふたりを見た。
シオンは何でもない、という愛想笑いで返す。

「俺の全財産は30万ルクだ……これ買つたら、無理! 生きていけない!」

「あはつ! 防具も買つたら無一文ね!」

「……蓮托生。お前も出せよ?」

「ええー……」

「えー、じゃない。保護者はお前!」

隅でこそこそとしたお金の相談は、武器はシオンが。防具はカラーラが出すということで話が付いた。

後で、クエスト受けてお金稼がないと……シオンは財布を見ながらため息を付いた。

「シオン。ため息は幸せが逃げますよ？」

分かっているのかいないのか。ユウの少しずれた慰めが憎たらしく……

第7話（後書き）

アズロラマカイトとは、パワーストーンの一類です。青と緑の石です。……名前のみお借りしました。

貨幣の話はまた次回（笑）

……別に面倒臭いとか言つてるわけじゃ無いんだからね！
大丈夫ダイジョウブ！ちゃんと考えてアルヨ（＼＼＼＼＼）

第8話（前書き）

通貨は、ルク＝円で考えてください。
金銀銅計算だとこんな感じ

半銅貨 1枚 : 1,000ルク

銅貨 1枚 : 1,000ルク

半銀貨 1枚 : 5,000ルク

銀貨 1枚 : 10,000ルク

金貨 1枚 : 100,000ルク

晶貨 1枚 : 1,000,000ルク

にしておこう（笑）

シオンの目の前には、黒い布地のふわりとしたスカートに白いレースがふんだんにあしらわれたワンピース、まるで海の中のような深い青のシルクの生地のロングドレス、オレンジの布に可愛くリボンがたくさん付いているがスリットがきわどく位置まで入っているドレス……などなど。

カラーラお勧めの洋服店『マドンナ』。

このお店のキャッチフレーズは『無いものは無い!』。

店内はすごい量の洋服や布が場所を占めていた。ちょっと背中が棚に当たつたものなら上から布や箱が落ちてくる位である。

「う~ん、スカートじゃパンツ見えちゃうよネー」

「ロングスカートなら見えないんじゃない?」

「でもそれすると戦い辛いとかあるでシマー」

「んーそうだよねえ。じゃ、やつぱりスペッツ、ミースカ、スリットで」

「あの……普通にズボンで良いんですけど……」

「却下」

「ううううう……」

カラーラと大柄の筋肉質の(たぶん)女性の店主がミニスカを手に熱弁をふるつてゐる。

ユウはあくまで普通の格好を望んでいたが、どうやら無理そうだ。

ちなみにシオンは不参加。女性物の洋服選びは無理だと言い、邪魔にならないように壁に張り付いて様子を見ている。

1時間ほどお店に居座り、黒い七分丈のTシャツに、ジーンズ素材のサロペット、黒のニーハイ、編上げのショートブーツをお買い上げした。

サロペットはユウの粘り勝ちでズボンになった。かなりの三一丈だが。

今は中央公園の噴水の前に3人で座っている。

子供たちが遊びまわっているし、恋人たちが仲良く笑い合っている。のどかな光景だ。

お昼時なので、あたりにはおいしそうな香りが漂っている。においの誘惑に負けたシオン達の手にはホットドックが握られていた。

「あ、そうそう。これあげるわ。」

カラーラはホットドックを食べ終えると、自分の背負っていた薬箱の引出しから、ポーチを取りだした。

そしてそのままユウの腰にベルトで固定する。

茶色のそのポーチはユウの格好によく似合っていた。

「これは？」

「ふふふふふ…… カーラさん特製の四次元ポケットよーーー！」

四次元ポケット。

どんな大きさ・重さの物を入れたとしても外見も重さも変わらない、究極の冒険者アイテム！！

入れたものを思い出しながら取り出せば、出すことができる。かなりの便利アイテムだが、上位ドラゴン白龍の髪とか超一流の冒険者でもめったに手に入れる事ができない素材でできている。希少価値の高いレアアイテムだ。

「レアアイテムを簡単に作るな。譲渡するな。……ぼくにも下さいおねがいします」

土下座しそうな勢いで頬み込むシオンに、仕方ないなあと言いつつも、薬箱からコエのよりも少し大きめの斜め掛けのカバンを取出して彼に渡す。

「中に縫い付けてある晶靈石は取っちゃダメよ」

「取つたらどうなる？」

「袋を破きながら中身が飛び出していく」

いつたいどんな魔術がかかっているのか気になるところだが、考
えないようにしておく。

晶靈石が10個ほど飾りのように並んで付いているので、面倒く
さそうな術式が絡まって作られているんだろうな、と思うだけにしておく。

シオンは歩き出したカーラの二の腕を取つた。
疑問の表情を浮かべた彼女に笑いかけながら言つ。

「ありがとな」

「ん」

（わああああ……なんだか甘い雰囲気が漂つてきます……公園の真
ん中でそれはないでしょ！）

コエは周りを見回すと、案の定、おばけやんやおじけやんがほほ
えましく見守つていた。

この一人は顔が良いから立つてているだけで目立つ。

本人たちはそのつもりが無くても、見た目ラブラブなカップルにな
なつてるので、傍から見ると恋愛映画を見ている気分になる。

シオンの笑顔が悪いのか、はたまたカーラの照れ笑いが悪いのか。

（「、これは……色々苦労しそうです。がんばれ自分！」）

仲良く笑いあう彼らを見て、そつと溜息を吐き、恥ずかしいの
しばらく近づかないでおこうと心に決めたコエだった。

第8話（後書き）

自分の全財産を前書きを基に計算…

「……少なっ！」

ポケットに入るよ（笑）叩いても増えないみたい。

ハリ○タのうんとか銀行のハ○一君の金庫の様には一生かかっても無理。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7153u/>

女神の居ぬ間に

2011年10月9日09時03分発行